2024年3月5日(火) 女性週刊誌「女性自身」に
婦人科主任副部長 柳井 しおり医師 が掲載されました

5大がん 胃がん 肺がん 大腸がん 乳がん 婦人科がん

「神の手」女性医師 全国15

※写真はイメージ

「同性だから卵巣を失う悲しみに寄り添える」

婦人科がん 「患者さんの喪失感に寄り添っていきたい」

倉敷成人病センター 婦人科主任副部長 柳井しおり先生

「女性特有のがん治療では、機能が損なわれることへの恐怖や喪失感も大きいです。卵巣がんの若い患者さんなら妊娠できなくなってしまう可能性も。同じ女性として、つねに患者さんに寄り添っていきたいと思っています」

そう語るのは、倉敷成人病センターの婦人科主任副部長の柳井しおり先生（41）。婦人科がんでも、子宮頸（けい）・体がんの治療として、同センターでは全国に先駆け腹腔鏡下手術を開始。'13年には、ロボット手術を導入し、国内でもトップクラスの手術数をこなしている。

'18年に子宮頸がんの治療では、開腹手術に比べて、腹腔鏡下広汎子宮全摘術は再発など予後が不良との報告があったが……。

「がん細胞が体の他の組織に付着するだけで再発リスクがあがるほど、腹腔鏡下手術は非常にテクニックが必要です。当センターでは、症例を数多くこなし、技術的にも高いスタッフがそろっています。がんの飛散を防ぐなど安全に行うためのノウハウを共有していることもあり、当院のデータでは腹腔鏡下手術によって子宮頸がん治療の予後が悪くなることはありません」

婦人科がんでも、化学療法や放射線治療などとのチーム医療体制が重要だという。

「いまのがん治療は、1人の外科医だけでは対処しきれません。

たとえば卵巣がんの治療では、ほとんどで抗がん剤が併用されますが、年度ごとに新しく使える薬が出ています。その分、それまでとは違う副作用が出ることもあるので、内科の先生のお知恵を借りることもあります。また放射線治療医や薬剤師などの協力も不可欠。外科医としては、チームで作りあげた治療機会を逃さずに最適な手術をすることを心がけています。

40～60代に多い子宮体がんは、閉経が近づいて生理の周期が乱れ出した時期からなりやすくなります。また家族歴もあるので、とくに子宮体がんの人が家族にいる場合には検診をしっかり受けてほしいと思います」